

【タイトル】

Mixed Reality の空間探索課題により、食事場面に変化がみられた一例

【はじめに】

今回、左半側空間無視を呈した症例に対し、Mixed Reality(以下 MR)を使用した空間探索課題を実施したところ、食事場面で左側の食べ残しに改善を認めたため以下に報告する。

【症例紹介】

60 歳代男性、主病名：右ラクナ梗塞、発症より 10 週経過。Br.Stage 上肢Ⅱ、手指Ⅱ、下肢Ⅲで感覚は表在、深部重度鈍麻。病棟生活では頸部が常に右側を向いており、持続的に正中に向け続けることが困難であり、食事場面では摂取自体は自力で可能も、左側に置かれているお椀に気がつかず、声掛けやお椀を右側に配置する介助が必要。

【方法】

使用時間は 1 日 20 分程度、期間は 2 週間。内容は数字抹消課題を実施。探索範囲は上下、左右ともに 30° にてターゲットは 10 個。評価期間を MR 使用前、MR 使用後 1 週間・2 週間、MR 終了後 2 週間の計 4 回とし、評価内容は BIT、TMT Part A を実施。

【結果】

BIT：MR 使用前 57 点、MR 使用後 1 週間 85 点、MR 使用後 2 週間 102 点、MR 終了後 2 週間 79 点。TMT Part A：MR 使用前 390 秒、MR 使用後 1 週間 276 秒、MR 使用後 2 週間 172 秒、MR 終了後 2 週間 215 秒。病棟生活では頸部は正中を向いており、左側からの声掛けにも反応できるようになった。食事場面では左側に置かれているお椀にも気づけるようになり、食べ残す様子がなくなり、MR 終了後も継続して食べ残しがみられなくなった。

【考察】

MR を使用した空間探索課題では視線の動きだけではターゲットが出現せず、頸部や体幹の回旋動作を伴った探索が必要とされる。今回、適切な難易度設定を行い、MR による 3 次元での探索訓練を行ったことで障害側への能動的な探索動作が増え、食事場面での食べ残し減少に繋がったと考えられる。